

私の教師としての経験の中で、しょうがいのあるお子さんたちとの出会いはかけがえのない時間でした。精一杯生きているお子さんが体全体を使って表現する姿は、まさに命の輝きそのものでした。その一人ひとりのかけがえのない命に向き合い（愛）ながら、私自身の教育に対する考えが深められたように思っています。

二十八日の月曜朝礼では、お子さんたちに次のような話をしました。



「みなさん」「おはよう」「ございます。」

今私は声を出さずに皆さんに挨拶をしました。

手の動きでなんとなく、意味が分かった人がいるかもしれません。「みなさん」「おはよう」「ございます」（動きの意味を説明する。）このように、手や指の形や動きで、言いたいことを表す言葉を「手話」と言います。テレビのニュースなどで、お話をしている人の隣で、手話で通訳をしている人の姿を見たことがある人もいることでしょうか。歌を歌いながら、手話で言葉を伝えようとしている歌手の方もいます。

手話は、音や声を聞くことが不自由な方々とお話をするためにできた言葉です。日本で使われている手話は、正しくは「日本手話」と呼ばれています。（手話辞典を示しながら）この本

は、日本語でよく使う言葉をどのように表すかを調べるための手話の辞典です。手話のできる方から教えていただいたのですが、指で「あ、い、う、え、お」のように、「あいうえお」などの音を、一つずつ表すこともできるのでさうです。

私が担任の先生として勤めていた小学校の隣に、ろう学校という、聞くことが不自由な子どもたちが学んでいる学校がありました。近くだったので、毎週一回あるクラブ活動は、いつも一緒に行っていました。当時私はサッカー部の担当をしていました。ろう学校のグラウンドはとても広かったので、二つの学校のサッカー部の子どもたちが、一緒にそこでサッカーをしました。子どもたちはすぐに仲良くなります。聞くことが不自由なため、話すことも不自由な子どもたちでしたが、サッカーをしているときには、どの子ども何人も変わりません。言いたいことをお互いに、身振り手振りで一所懸命伝え合っている。サッカークラブの練習や試合を楽しんでいました。次の週のクラブの時間を、楽しみにしてくれました。私は、聞くことが不自由な子どもたちの瞳の輝きや頑張りから、多くのことを教えてもらいました。

立教大学には、英語やドイツ語、フランス語と同じように、「日本手話」という科目があり、

学ぶことができます。聞くことが不自由な方々と、「手話」を通して話ができるようになることは、英語やドイツ語などの外国語を学んで話ができるようになることと同じです、と立教は考えているからです。立教と名の付くすべての学校では、だれとでも「共に生きる」ことを大事にしています。とくに、困っている人、弱さを感じている人、悲しんでいる人に、心を寄せることを学びます。

皆さんのお家にも、手話を学んでいらっしゃる方や、上手な方がいらっしゃるかもしれませんね。皆さんも、手話に興味がある人は、少しずつ覚えてみてください。

（手話と発話で）「みんなで」、「いっしょに」、

「学んでかしく」「なりましょう」

「お話を」、「終わります。」



二〇一五年、立教小学校に着任してしばらくたったある日、当時の立教大学総長吉岡知哉先生にお話を伺う機会がありました。そのとき、立教大学では言語科目として「日本手話」がある、ということを知りました。お話を伺いながら立教スピリット健在なり、と胸が熱くなったことを今でもはっきりと覚えています。

（立教小学校校長 佐々木 正）